



絵本が繋ぐ 人の心

あけぼのぼんぽこ保育園 主任 三倉 敏浩

思い出される父親との思い出

私の父は至って一般的なサラリーマンでした。しかしそんな父親が毎晩、私に絵本を読んでくれていた事を今でもよく思い出します。その頃の私は（理由は覚えていませんが）両親ではなく曾祖母と一緒に仏間で寝ていましたが、寝る前になると父親が来てくれて布団に横になっている私に絵本を読んでくれました。読んでもらう絵本はよく本屋に置いてある、サイズの小さな童話のシリーズ絵本でしたが、本屋に寄る度に新しい絵本を買ってもらえるのがあの頃の私の楽しみでした。

確か一番好きだった童話は『ちびくろサンボ』。理由は、物語の最後に“虎が溶けてバターになったところをホットケーキにして食べるシーン”が子ども心に美味しそうで美味しそうで…とにかくお気に入りの1冊でした。

いつしか大人になり…

そんな事があってなのか（あるいは幾分かは影響があってなのか）私は保育士という職業に就き、毎日『絵本』というものに触れる機会が人一倍あります。保育園の子ども達に読み語りをする事も楽しいですが、何より絵本そのものが好きです。保育士になってたくさんの上質な絵本に出会う度に感動を覚えたり、「この作者の絵が好きだな」「この童話って（大人になるまでわかっていなかったけれど）とても深い物語だったんだ！」と主観的な気づきも増えたりと、益々その魅力に引き寄せられていきました。勿論“自分の子どもが生まれたらこんな絵本を読んであげたいな”と考える事も多くありました。

今度は親になり…

実際に子どもが生まれ、子どもの為に絵本を買うようになりました。さあ絵本を買おう！ となっても、そこはやはり両親共に職業柄なのか、「この絵本が良い！」「いやいやこっちの絵本の方が合ってる！」と、自分達の趣味・嗜好の主張が始まります。そして互いに好きな絵本を買ってみたり、自分達で持っていた絵本を読んでみたりしている内に次々と絵本は増えていきました。

ある日、長男が「これ読んで！」と絵本棚に置いていた年長児向け（なんならそれ以上の年齢向け）の絵本を持ってきました。「それはまだ難しいし、長いからやめとこう」と諭しましたが、「いやだ！ 読んで！」と、息子も譲りません。結局、寝る前に30分近くかかって絵本を読む羽目になった時は、さすがに（保育士でありながらも）「もう勘弁してくれ」と感じたのが本音です。（言うまでもなく、翌日からこの絵本は彼の目に着かない所に旅立ちましたとき。めでたしめでたし！）

そして反省する事もあり…

さて、ここでひとつ反省しなければならない事に気がつきます。有りがちな話かもしれませんが、長男に読んでいた『絵本の時間・量』（なんなら絵本の所有権も含めて）と、次男に対しての『絵本の（両親の）熱量』が、あまりにも違い過ぎた事です。ああ次男に絵本読んであげられていないなあ…そして買ってあげてもいないなあ…と自責の念に駆られます。

そしてその事に加えて、長男はまだ“自分が世界の中心”と思っている、“自我形成の真っ最中の2歳児”。既に読まなくなった赤ちゃん向けの絵本だとしても、なかなか自分の絵本を次男に貸してあげようなどとは思いません。兄弟で偏りが生まれる事は、親として永遠の課題ですね。それでも二人の子ども達にはたくさん絵本を読んであげたいと思いますし、絵本を好きになって欲しいなど願うばかりです。

最近では、寝る前長男に絵本を読んであげようとする「よんであげるから！ こっちにおいで！」と、自分の枕に私を寝かせて絵本を読み語ろうとしてくれます。もちろん、まだ2歳児なので文字を読む事はできませんが、自分が読んでもらった時の事をよく覚えていて、それとなく読み進めていってくれます。お化けが出てくるような怖いシーンは声色を低くし、勢いがあるシーンは力強くスピーディーに読んでくれます。その姿は私の読み方そのもので“自分はこうやって息子に絵本を読んでいるのだな”と、自分の姿を振り返り感慨深く感じたりもします。そして何より、自分に対して絵本を読もうとしてくれる息子の純粋な瞳に胸を打たれ、『絵本ってやっぱり素敵なものだな！』と、更に絵本が好きになる今日この頃です。



繋がっていく心

自分が父親にしてもらったように、自分が息子に絵本を読み語る。いつか息子にも子どもが生まれた時には同じように絵本を大切にしてくれるだろうか。そうだ、今度実家に帰った時に父親に読み語りでもしてみようか！ …いや、それはちょっと照れくさいからやっぱりやめておこう。

絵本は時間と世代を超えて『人と人の心を繋ぐツール』なのかもしれません。